

佐藤 嗣道 先生

薬害と政治との関係はあるのか

私が、サリドマイドの薬害を知ったのは、小学生の時にテレビで手足の短い女の子が、箸や櫛を上手に使ってご飯を食べたり、髪をとかしたりしている様子が放送されているのを見たときでした。子どもながらに自分よりもずっと器用だな…と感心してテレビを見ていたことを思い出しました。

看護学生時代に、サリドマイドはつわりがひどい方にとっても画期的なお薬だったと聞きました。妊娠がはっきりしない時期に、胃の不快感や痛みを訴える方がかなり多くいらっしゃいます。お母さまのお気持ちを考えますと、とても胸が痛みました。妊娠しているかもわからない時期に、ましてやサリドマイドを内服することでこんな事態が起こるなど予想もしていなかったのですから。

日本の政府はなぜ薬剤を中止するまでに時間を要したのでしょうか。製薬会社と政府の癒着が原因であることが言えるのではないのでしょうか。現在新型コロナウイルス感染症に関連して、ワクチンや東京オリンピック・パラリンピックの開催についての物議でも同じことが言えるのではないかと考えます。新型コロナウイルス感染症対策分科会の尾身茂会長が、この状況でオリンピック・パラリンピックを実施することは普通ではないと意義を唱えました。その時政治家は、「こんな大事な話は、菅総理とふたりのところで話してほしい」と、ある政治家が話すと、同じことを言う政治家が次々と出てきました。このような体質は、今も昔も変わっておらず、私たちの健康や生活を脅かす可能性がある事柄は、もっともっと知らされずに進められているのだと悟りました。

サリドマイドの薬害によって目に見える奇形が認められれば、どちらに遺伝があるのかといった争いが起こります。おおむね弱者である「嫁」という女性側に「血の問題」が押し付けられることがあります。夫の身内は自分たちの血族にはそのような子どもが生まれる素地はないと、自分達の血筋を守ろうと必死です。障がいをもって生まれた子どもが健やかに育つためにどのような環境を整えるべきかを考えるなど到底及びません。もちろん、両親をはじめ祖父母や周りの大人たちが現状を受け入れるまでには時間がかかることも承知です。しかし、目の前には生きようとしている子どもがいることを忘れないでほしいと思うのです。

今の日本の政治家たちに言いたい。保身ではなく、自分たちの地位や名誉、お金のために犠牲となる国民がいることを理解してほしいと願うばかりです。

本日は貴重なお話をありがとうございました。